

博物館教育論13 子どもと博物館、子どもの博物館

1. 子どもと博物館 Kyoiku2020_13-4.mp3

1) 子どもの特徴

ここでいう子どもは未就学児から小学生を想定している。子どもの特徴を博物館の視点から記すと、小さな身体、低い視線、弱い力、少ない知識や経験、集団へのなりやすさ、身体バランスの悪さなどがある。とりわけ未就学児の場合、視力の未完成、身体機能や運動神経の未発達、集中持続時間の短さ、があげられ、乳幼児であれば派手な色や正面からの視線を好むなどの傾向もある。展示や教育事業は、これらの特徴を踏まえたうえで展示や教育事業をおこなう必要がある。さらには子どもを対象に据えた子ども博物館を設計する場合もある。子ども博物館や科学館がその例となる。

子どもの特徴を捉えたテレビ番組にNHKのEテレ（教育テレビ）の「おかあさんといっしょ」と「セサミストリート」がある。両者ともに番組は短いコーナーの集成となっている。これを博物館の展示や教育事業にそのまま応用することは難しいが、参考事例として覚えておきたい。

2) 発達への配慮

子どもに向けた展示での配慮は、視線の高さを意識した陳列、押しボタンや操作装置に必要な力の調整、解説文章の漢字の制限やふりがななどが必要となる。これらは心と身体の発達段階への配慮と言い換えることもできる。内容では触れる展示や操作操縦、身体を動かす装置などの体験的要素が好まれる。

経験的には、未就学児の場合、おとな向けに調整された日常生活が不便で苦痛を感じているため、子ども向けアレンジされたイスや机があるだけでうれしいように見える。

2. 子ども居場所と博物館

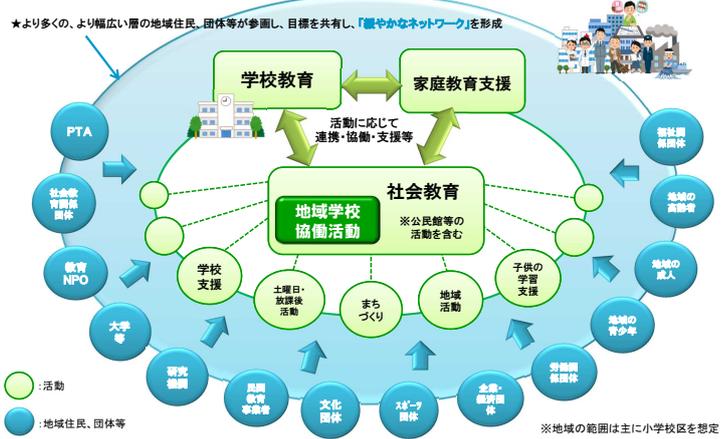
1) 学習場所としての博物館

おとなが期待する子どもによる博物館の利用に学習がある。この場合、博物館に期待されているのは学校では得られない知識や体験である。具体的には、豊富な実物資料、高度な実験や観察、精巧なレプリカ、大規模あるいは高価な展示装置などであり、期待に応えるには資料や設備の充実が必要



上から
色鮮やかな展示装置が置かれた展示室（大阪市立科学館）
触る、動く、動かす、体験が好まれる（福岡市科学館）
身体能力も考慮する必要がある（京都市青少年科学センター）
ディスカバリーコーナー（福井県立恐竜博物館）

◎ 次代を担う子供に対して、どのような資質を育むのかという目標を共有し、地域社会と学校が協働。
 ◎ 従来の地域団体だけではなく、新しいつながりによる地域の教育力の再生・充実は、地域課題解決等に向けた連携・協働につながり、持続可能な地域社会の源となる。



地域全体で未来を担う子供たちの成長を支える仕組み（概念図）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/054/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/11/05/1362869_05_1.pdf

となる。

2) 子どもの居場所としての博物館

日本の小学校の隠れた大きな役割に託児所機能がある。しかし託児所機能は週末や放課後には失われ、その時間には子どもの居場所は家庭や友人宅、習い事や塾、公園などとなる。しかし現在では友人宅に行くにも予約が必要、公園は未就学児や老人の場所など、学童期の子どもの居場所となりにくくある。塾や習い事も所属していない場合は居場所になり得ない。とりわけ2002年度から学校週5日制が実施されたことは大きな契機となった。

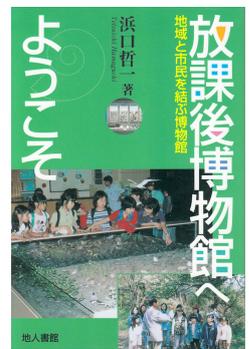
そこで、博物館もおとなの目が行き届いた健全で学習可能な子どもの居場所としての期待が高まった。悪い意味での「たまり場」になるのではという懸念のなか小中学生や高校生の入館料無料化が始まり、文部科学省では「子どもの居場所」を確保する施策や補助事業を進め、博物館も社会教育機関として加わった。同省の事業は「学校と地域でつくる学びの未来」というウェブサイトに関連事業が網羅されている。

これらの事業は学校教育と社会教育、そして住民が一体となって子どもを見守る、教育を進めるという考えを具体化したものである。博物館の参加は、社会教育機関としての役割からである。本来機能である資料の収集や保存という面ではない。文部科学省「子どもの居場所づくり推進事業」 <http://manabi-mirai.mext.go.jp/>

地域子ども教室推進事業について_全科協ニュース_vol35no5 <http://jcs.jp/wp-content/uploads/news/PDF/vol35no5.pdf>
[Kyoiku2020_13-2.pdf](http://www.kyoiku2020.com/kyoiku2020_13-2.pdf)

3) 社会的包摂

社会的包摂 [ほうせつ] は聞き慣れない言葉である。これはイギリスの博物館研究の報告「博物館の社会的機能の拡大「社会的包摂」」が出版されてから博物館界の流行語になった。この報告では社会から疎外された人たちに向けて博物館が手を差し伸べてきた事例が収録されている。貧困者に加え、性産業従事者なども含まれる。これを博物館の社会的機能も呼ぶ。日本では「放課後博物館」（浜口 2000）を標榜する平塚市博物館、遠隔地で高校生のたまり場となっている地方博物館などもあり、子どもの居場所としての博物館は地方や小規模館実践されている。他方、都市部での底辺者の包摂は未遂と思われる。



博物館の社会的機能の拡大「社会的包摂」 Museums and Social Inclusion: The GLLAM Report (2000)

<https://le.ac.uk/rcmg/research-archive/museums-and-social-inclusion>

放課後博物館へようこそ—平塚市博物館の活動から（札幌市博物館活動センターニュースレター No.15, 2003）

<https://www.city.sapporo.jp/museum/museletter/documents/muse15.pdf> [Kyoiku2020_13-3.pdf](http://www.kyoiku2020.com/kyoiku2020_13-3.pdf) [Kyoiku2020_13-5.mp3](http://www.kyoiku2020.com/kyoiku2020_13-5.mp3)

3. 子どもの博物館

1) 子どものための展示

子ども向けの展示の要点には、予備知識が不要、目の前の現象で楽しい、さわる触れる、といった点がある。前述のとおり体験型の展示がよるこばれる。文章や知識よりも身体で感じて納得するような展示である。このような展示は科学館が得意とする物理学分野の力学や電気、化学変化などでは容易であるが、生物多様性や歴史では困難かも知れない。生物分野では拡大模型の操縦、歴史や人文系では衣装の着用などがおもな体験型の展示だろう。動

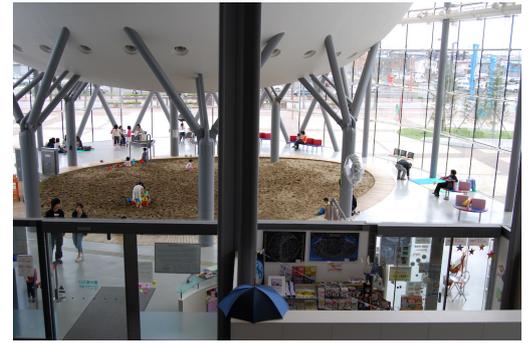
物園での体験は「ふれあい動物園」に見られるおとなしい小動物の抱きかかえ、給餌などの飼育体験、水族館ではタッチプールや餌やりとなる。タッチプールでは安全で接触に強いヒトデやナマコなどの棘皮動物やサメの仲間（板鰓類）が用いられることが多い。

2) 子どものための博物館

代表的な子どもに向けた博物館に科学館がある。科学館は展示装置による物理現象の再現を主眼とする。これは、予備知識無しに楽しむ。理科の内容にも合致した学習施設でもあり、代表的な子どものための博物館といえる。

英語圏では children's museum、日本語でも少数であるがチルドレンズ・ミュージアムと名乗る施設もある。釧路市こども遊学館は科学館に砂場を設け、一般の科学館よりも低年齢に向けた内容にした。北海道では冬は積雪と凍結で砂遊びができないため好評で、英語名称は Kushiro Children's Museum。公式サイト <http://www.kodomoyugakukan.jp>

一般向けの博物館では、子ども向けの展示室「ディスカバリー・ルーム」discovery roomを設けることがある。その内部の空間は原色の色使い、親しみやすいキャラクターの多用といった特徴が見られる。



上：釧路市こども遊学館の砂場
下：スミソニアン協会自然史博物館のディスカバリー・ルームは実験室的

4. 学校教育・児童と博物館 [Kyoiku2020_13-6.mp3](#)

1) 学校教育の目的

教育基本法によると、教育の目標は「人格の完成」であり（第1条）、義務教育の目的は「社会において自立的に生きる基礎を培〔つちか〕」うことである（第5条）。学校の役割は知識の伝授だけではない。学校教育法では義務教育の目標に「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」（第11条）ことが明記されている。学校教育法では学齢による呼称は次のように使い分けている。幼稚園は幼児、小学校は（学齢）児童、高校は生徒、大学生や高等専門学校は学生。中学校には現行法には記載が無いが旧法では（学齢）生徒、専修学校も生徒だが慣習的に学生を用いる。

学校で学ぶ教科の内容はいったい何だろう？ 最新の研究成果による科学知でもなければ、歴史と文化に裏付けられた民俗知とも異なる。それは、学校にだけ存在する学習用に特化した知識の型ともいえるものだ。では、博物館の知識とはどんなものだろう。やはり、最新の科学や学術に裏打ちされた事実のはずだ。

2) 学校が博物館を使うとき

小学校から高校までの授業内容の指針である学習指導要領には、小学校では総則で博物館の利用に触れ、社会と理科そして総合的な学習の時間に博物館の利用が明記されている。夏休みの自由研究でも博物館の

(7) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や**博物館**、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。

小学校学習指導要領。総則「教育課程の実施と学習評価」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf

存在を前提にしている場合がある。総合的な学習の時間でも博物館との協業が盛んになっている。

かつては学校からの博物館利用は「おまかせ」であり、引率教諭はお客様状態であった。その反省から教員と学芸員がともに主催者として博物館学習を作り上げる「博学連携（はくがくれんけい）」が強く言われるようになり、総合的な学習の時間（総合学習）の共同推進など現在では多くの博物館で実現している。

学齢期の子どもと博物館の関係では、生徒（＝中高生）が来館しないという事実がある。中高生の来館を増やすのは大きな課題として認識されている。もちろん生物や化石、考古学や歴史に熱中している青年は入り浸りになる。他方「普通の」生徒は足が遠ざかる。現在のところ、そういう年頃だからという扱いで終わっているようだ。

5. 教える理論あるいは教育観

1) 系統主義（科学主義）と経験主義（生活主義）

系統主義とは、一般的には経験主義に対する概念として、知識・理解や技能の「系統」を重視する教育の立場を意味する。すなわち、学校で教える教育内容は、科学や学問の成果であるべきだとし、それらについて段階を追って系統的に指導するという考え方。

経験主義の立場は、生活科や総合的な学習時間において、児童・生徒の発想を生かしながら、課題に対して体験的な学習を展開して、必要な事項を身に付けさせようとする考え方。

実際には、両者が一体となって教育の成果を上げていくという考え方が一般的。

東京教育研究所：系統主義 <https://touken.tokyo-shoseki.co.jp/keyword/53>

2) 構成主義

正解を直接暗記するのではなく、学習者が正しい事柄を主体的に学びとるという考え。学習とは正解という客観的事実の注入という考えを「教授主義」（客観主義）といい、それに対抗する考え方。下のウィキペディアの例はわかりやすい。

従来は単語や文法を教師が一方的に説明し、学習者はそれを理解して暗記するのが教育であったが、文法であれば構成主義の立場からは以下のような手法が採用される。

教師が特定の文型を使った文を提示する。

その中には文法的に正しいもの正しくないものが含まれている。

教師はどの文が正しく、どの文が正しくないかだけ示す。

学習者はそこから文法的に正しくなる要件を見つけ出す。

思考としては納得できるものであり、他者理解の手助けにもなる。博物館教育の関係者のなかには構成主義を過剰に主張する人たちも見られるが、構成主義は考え方のヒントとして理解しておけば十分。

構成主義（教育） - Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A7%8B%E6%88%90%E4%B8%BB%E7%BE%A9_\(%E6%95%99%E8%82%B2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A7%8B%E6%88%90%E4%B8%BB%E7%BE%A9_(%E6%95%99%E8%82%B2))

3) 大正新教育 書写から自由画へ

日本の教育は習字に代表されるように、お手本をまね、そのとおりに作る事が目的とされてきた。創造性や主体性は重視されていなかった。明治以降に始まる学校教育でも同様で、アメリカにならい教室形式の一斉教授法が取り入れられた教育の内容は、教員に指示に従う、正解を求めるといったものであった。お手本の暗唱や再生産といえる。漢字の書き取りや「計算ドリル」はその現代版である。

暗証や書写は重要な基礎訓練であり、個性の発揮は基本を修得してから後に始まるという考えも成立する。芸術や科学での高度な創造性はそうだろう。けれども子どもの段階でも、基礎知識の習得途上であっても自由な発想による創作は可能であり、それによって引き出される、伸びる能力もある。そのような部分に注目して始められたのが、著作権を持つ



自由画はできて100年

（自由）作文や自由画（写生、想像画）である。これらは後に「大正新教育」と呼ばれるようになった。

作文や写生は画期的な新しい教育方法だったのである。